

## 2-4.開拓地三方原台地の営みにみる歴史的風致

### (1)はじめに

浜松市における畑作農業の中心地域となっている<sup>みかたはら</sup>三方原<sup>1</sup>台地は、中心市街地の北西に広がる洪積台地である。台地の東端は河岸段丘と呼ばれる階段状地形で、多少の起伏が見られるものの大部分は平坦で、台地の周辺部には大小の浸食谷が入り組んでいる。

土地が平坦で日照時間が長く、気候にも恵まれた地域であるにも関わらず、台地上には大きな河川が無く、地下水も15～20メートルの深い井戸を掘らなければ得ることはできず、古くから慢性的な渇水に悩まされる地域であった。また、台地の表面は酸性の強い地味のやせた赤土に覆われていたことから、明治の初めまで荒野のまま放置されていた。

本格的な開拓が始まったのは明治以降で、戦後の国営開拓や<sup>みかたはら</sup>三方原用水事業の完成により浜松市における畑作農業の中心地域となった。現在では<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯をはじめとする種々の作物の畑地が広がり、農作物の生産活動や先人の遺徳をしのび開拓地の五穀豊穰を祈る祭礼といった、開拓の歴史と伝統を感じることができる環境が継承されている。

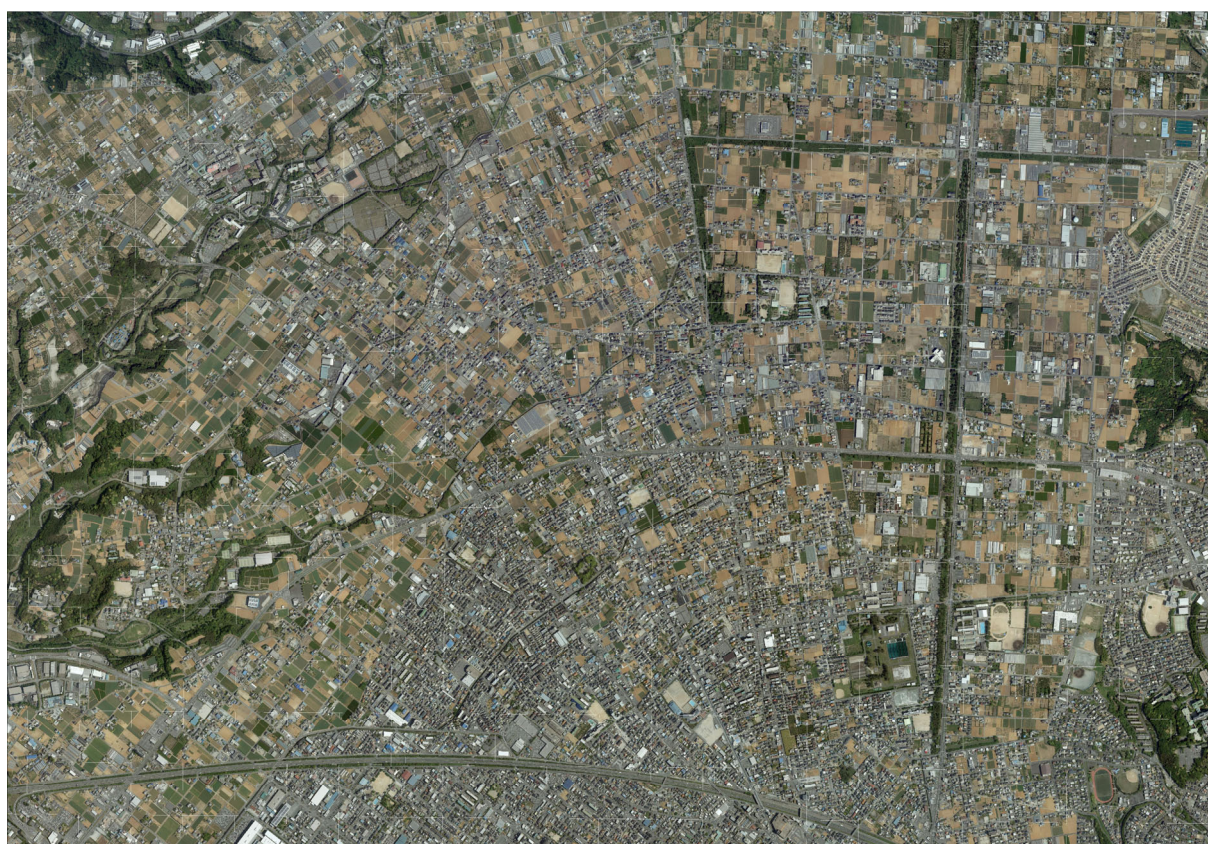


図2-4-1 上空から見た三方原地区

<sup>1</sup> 地元では「みかたばら」「みかたっばら」と呼ばれている。

## (2)開拓地三方原の歴史

### ①明治における開拓

江戸時代までの三方原台地は、姫街道などにわずかに松が生えている程度の広大な原野であったが、明治維新のもと近代国家建設に向けて、明治2年(1869)、気賀の商人であった気賀林<sup>き が りん</sup>により三方原の開拓が始まった。

気賀林は明治維新により職を失った士族の生活を支えるため、入植者たちの居所を建築し、明治2年(1869)に受入れを始め、最終的に士族800戸を受け入れた。明治6年(1873)には浜松県令から開墾の許可が下り、本格的に茶園の造成を開始した。茶園整備のきっかけは、開拓の鉞が入って間もない明治6年(1873)当時新設されたばかりの小学三方原学校を視察に訪れた浜松県令林厚徳<sup>はやしあつり</sup>が、地元の代表者に茶の栽培を奨励したことに始まるという。

茶園の開拓は100町歩(100ヘクタール)を目標として、三方原に100町歩の払下げを受け、50町歩を士族分、50町歩は農民分として茶園を拓き、明治7年(1874)に茶の実をまくことから始められた。1町歩の茶園の畝を延長すると1里(4キロメートル)あることから、この100町歩の茶園には「百里園」の名称がつけられ、三方原台地に本格的な産業として興った。

この大がかりな茶園開拓の先頭に立ったのは、百里園の初代園長となった気賀林と横田保<sup>よこたまたもつ</sup>の2人で、明治10年(1877)に気賀林は自身の屋敷の隣に製茶所を建設し、茶の製造を開始した。明治16年(1883)気賀林が亡くなり副園長であった横田保が園長を引き継いだ。横田は、製茶所が茶園の中心部になかったこと、また製茶所が手狭だったことなどから、半官半民の大規模製茶工場を茶園の中心部に新たに建設することを決断し、明治19年(1886)5月に新工場を完成させた。

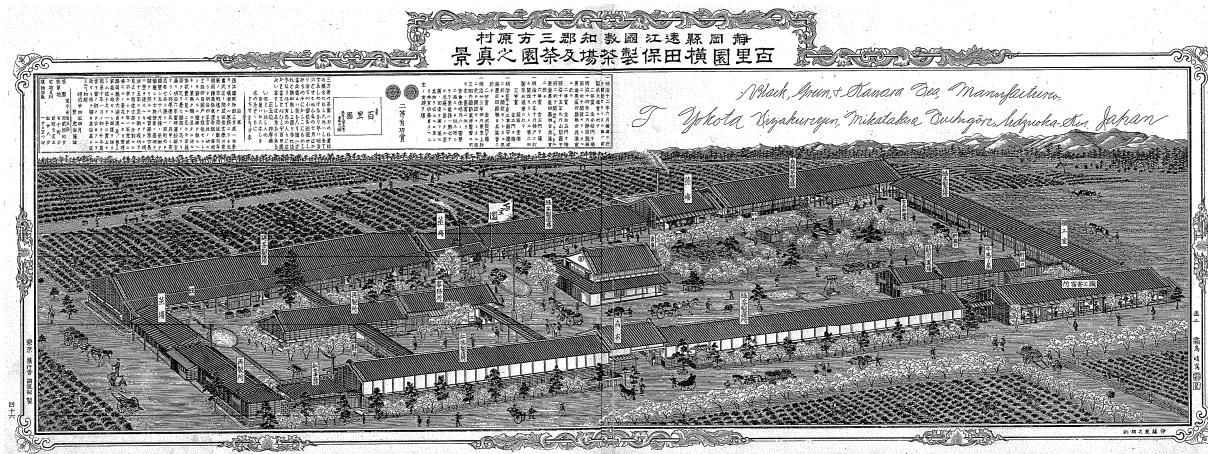


図2-4-2 明治20年代の百里園製茶工場全景【銅版画による日本博覧図之中(静岡県)】

この工場で製造された茶は、すべて手揉みで、緑茶をはじめとし、紅茶、烏龍茶など多種に及び、輸出はアメリカなど外国向けに業績を広げ、なかでも工場に併設された茶業伝習所

<sup>1</sup> 戸籍では「けが」と読むが、地元では「きが」と呼ばれている。

は県下の茶士の養成に大きく貢献した。明治24年(1891)ごろには茶園面積は120町歩に達して隆盛を極め、三方原<sup>みかたはら</sup>は一大茶生産地となった。

しかし百里園<sup>ひゃくりえん</sup>製茶工場の全盛期は長く続かず、明治30年(1897)ごろから茶の相場の暴落により経営が悪化し横田園長が亡くなった明治34年(1901)には休業状態となり、明治37年(1904)には百里園<sup>ひゃくりえん</sup>は解散してしまった。建物は移築されたり焼失したりして、当時をしのぶものは残っていないが、気賀林<sup>きがりん</sup>屋敷跡等明治期の開拓関連施設跡地<sup>みかたはら</sup>には三方原歴史文化保存会により石柱が建てられている。

## ②昭和のはじめ

明治の初めに入植した士族800戸の大部分が離農や離村してしまったが、それに代わって主に岐阜県、愛知県や三重県及び周辺<sup>みかたはら</sup>の町や村などから三方原台地に大なる希望を抱いて移住する者によって、戸数は徐々に増加し、昭和5年(1930)には500戸を超えるまでになった。

開拓途上の地域で経済的に苦しい時代、三方原台地<sup>みかたはら</sup>では住民たちの並々ならぬ努力と知恵の集結により、麦、雑穀、及び野菜類はそれぞれに生産をあげるようになったが、肝心の主食である米については水利がないため収穫することができないという片肺の状態であった。

三方原台地<sup>みかたはら</sup>に住む人々にとって、台地に水を引きたいという願いは長年の夢であり、水を引く計画は明治<sup>きんぼらめいぜん</sup>の金原明善以来幾度も試みたがいずれも実現には至らなかった。昭和の初めにも三方原台地<sup>みかたはら</sup>に天竜川の水を引いて水田を作るという大計画があり、台地までを農林省、台地上は県が担当して測量が行われた。計画が実現すれば、この台地でも主食である米の生産が可能になるということで、住民は1日でも早く実現することを願っていた。しかし、昭和6年(1931)の満州事変の勃発により、この計画は中止され、開発予定地とされていた県有林伐採地域は陸軍省の買収するところとなり、またしても実現には至らなかった。その後、井戸を掘り動力で水をくみ上げて水田を始めた人々がいたが、これはごく一部の農家であり、三方原台地<sup>みかたはら</sup>に黄金の稲穂が波打つようになったのは戦後のことである。

## ③戦後における開拓

戦後の食糧増産計画のもと、主に旧陸軍の飛行場や爆撃場として利用されていた現在の中央区三方原地区<sup>みかたはら</sup>と高丘地区<sup>たかおか</sup>などの約1,460町歩の荒廃地を緊急開拓事業の計画対象とし、入植者による開墾が行われ、荒れた農地を一から耕し、甘藷を始め馬鈴薯など芋類の栽培が盛んになった。しかし、開墾したての土地は極度に痩せていて酸性が強く作物は育たず、さつま芋を植えても蔓は1メートルしか伸びず、芋も小指程度といった状況で、有機肥料の投入が必要となり、浜松市街地の生ごみ等を牛車や大八車で採りに行き、有機質の投入に励んだ。

このころの三方原台地<sup>みかたはら</sup>は、道路排水等が未整備だったため、大雨が降る度に冠水していた。馬鈴薯栽培において、水はけが悪いことは病気が発生しやすくなる要因になり、また地中の

芋だけでなく葉や茎なども腐ってしまうなどの被害を及ぼすことになる。また収穫時期がちょうど梅雨時期の6月から7月と重なるため、掘り取り、土取りや選別調整に苦労していた。

このため、農地開拓営団は緊急開拓事業と併せて大型の揚水機や用水路、排水路、道路、防風林、飲料水施設などの基盤整備を始めた。これらの整備は、昭和23年(1948)には農林省直轄の「国営三方原開拓建設事業」に継承され、昭和35年(1960)に完工したことから三方原台地の水田475町歩と畑984町歩の計1,459町歩が造成され、この排水路の整備により排水不良も解消されていった。

しかし、新たに整備された幹線用水路では開墾整備した一部の農地には配水が可能となっただけで、地域内の農地では依然として農業用水の確保が困難な状況に置かれていた。このため、三方原地域は都市近郊の良好な立地条件にありながら、安定的な農業用水の確保という課題を抱えながらの農業経営を余儀なくされていた。

このようななか、昭和35年(1960)から事業着手された国営三方原用水事業により秋葉ダムから取水し、農業用水、生活用水、工業用水を供給する総合的な開発が行われ、昭和43年(1968)には農業用水が通水開始、昭和45年(1970)に幹線水路の全工程が完了し、豊穡の地へと変貌を遂げた。これにより三方原馬鈴薯など、用水の恵を受けて生産される地域ブランドが誕生している。

また、緊急開拓事業と併せて整備された幹線道路は、三方原台地を南北に貫く幅員8メートルの一本道路で、広野のなかをはるばると続き、満州から引き揚げた人たちが多く開拓に加わったことや、満州に似た景観だったことから、いつしか「満州道路」と呼ばれるようになった。現在は平行して都市計画道路が整備され、自転車歩行者専用道路に姿を変えているが、今なお総称して「満州道路」と呼ぶ住民は多い。この満州道路沿いには、戦後の開拓者によって植樹された松林が現在でも残っている。この松林は遠州のからっ風を防ぐために植えられた防風林で、戦後の開拓を現在に伝える三方原台地の貴重な遺産の一つであり、地域の景観を構成するうえでも重要な役割を担っている。



図2-4-3 開墾機による開墾の様子

### (3)歴史的風致を構成する建造物

#### ①<sup>みかたはら</sup>三方原台地の製茶工場

##### ア.<sup>うつやま</sup>宇津山製茶 製茶工場

<sup>みかたはら</sup>三方原台地西端の中央区湖東町<sup>ことうちよう</sup>に立地する製茶工場である。昭和4年(1929)に自園による荒茶製造を始めたのが、<sup>うつやま</sup>宇津山製茶の始まりとされている。

<sup>うつやま</sup>宇津山製茶で現存する最も古い製茶工場は昭和30年(1955)に建築された。工場は木造亜鉛メッキ鋼板葺平屋建ての約73坪の建物で、敷地内にはほかに居宅や倉庫、店舗などが建ち並ぶ。



図2-4-4 宇津山製茶 製茶工場

##### イ.<sup>はやかわ</sup>早川園 製茶工場

<sup>みかたはら</sup>三方原神社の北東300メートルほどに立地する製茶工場である。<sup>はやかわ</sup>早川園の創業は明治中期とされ、以来茶業一筋で営業している。

<sup>はやかわ</sup>早川園で現存する最も古い製茶工場は大正12年(1923)に建築された。工場は木造瓦葺平屋建ての約42坪の建物で、敷地内にはほかに居宅や倉庫、店舗などが建ち並ぶ。



図2-4-5 早川園 製茶工場

##### ウ.まるたま製茶 製茶工場

浜名区細江町中川<sup>ほそえちやうながわ</sup>に立地する製茶工場である。昭和44年(1969)に㊦製茶工場として開業している。

まるたま製茶で現存する最も古い製茶工場は昭和44年(1969)に建築された。工場は軽量鉄骨造スレート葺平屋建ての約88坪の建物で、敷地内にはほかに居宅や倉庫、店舗などが建ち並ぶ。



図2-4-6 まるたま製茶 製茶工場

##### エ.<sup>おきむら</sup>沖村製茶 製茶工場

浜名区細江町中川<sup>ほそえちやうながわ</sup>に立地する製茶工場である。<sup>みかたはら</sup>三方原台地の一角に入植し、大正初期に開墾された松林のあとに茶樹が植えられ、本格的に茶の栽培がなされた昭和5年(1930)から6年(1931)ごろが<sup>おきむら</sup>沖村製茶工場の始まりとされている。

<sup>おきむら</sup>沖村製茶で現存する最も古い製茶工場は昭和22年(1947)に建築された。工場は木造瓦葺平屋建ての約82坪の建物で、敷地内にはほかに居宅や倉庫、店舗などが建ち並ぶ。



図2-4-7 沖村製茶 製茶工場

## ② 三方原用水

三方原用水は、三方原台地及びその周縁耕地 5,918ヘクタールの農地用灌漑用水を確保するとともに、浜松地方の発展に備えて将来の拡張計画に必要な工業用水及び上水道用水も確保する目的をもって、昭和35年(1960)に事業着手された大事業である。

国営事業としては秋葉ダム取水口から浜名区都田町までの3者共有(農業、工業、上水道)の導水幹線 22.3 キロメートルと2者共有(工業、上水道)の南部幹線 15.6 キロメートル及び農業用水の北部幹線 5 キロメートルの3段階にわけられ、昭和42年(1967)には取水口から三方原台地までの幹線水路がほぼ完了し、通水式が行われ、翌年(1968)から農業用水の取水が開始された。

昭和42年(1967)8月29日の静岡新聞には、前日に行われた通水式の記事が掲載されている。記事によると、「待ちに待った水が幅二メートルの用水を厚さ三十センチの帯となって力強く押し寄せると『来た、来た』と思わず歓声もれ、三井行雄三方原土地改良区理事長の音頭で万歳三唱、通水を祝う数百個の風船が初秋の空に舞い上がった。」とされており、長年待ち望んでいた関係者の思いを窺い知ることができる。

施設の老朽化に伴う機能低下や耐震性の欠如等、用水の安定供給に対する懸念を解消するため、平成27年(2015)から10ヵ年計画で、「国営三方原用水二期土地改良事業」に着手し、整備を進めている。

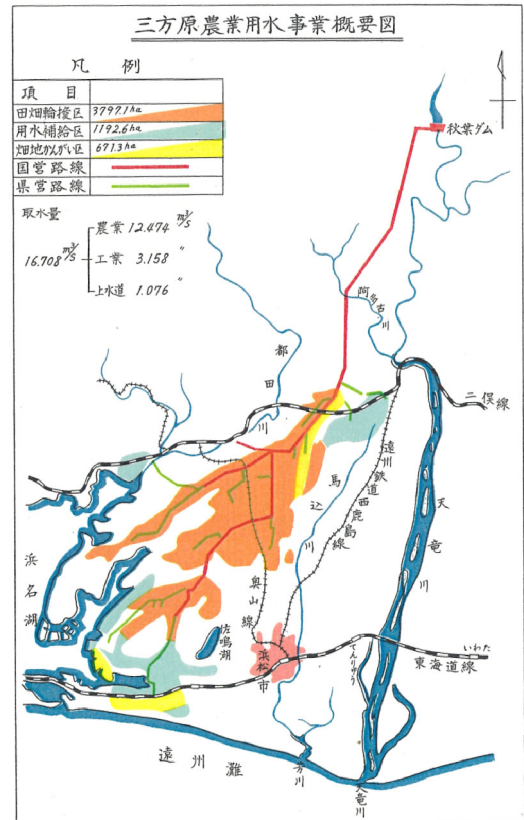


図2-4-9 三方原用水の通水式 (昭和42年)

図2-4-10 三方原用水13号分水工(円筒分水)

### ③三方原神社

明治初期に入植した士族は浜松の八幡宮を信奉していたが、村から遠いため浜松の元城神社(元の名称は東照宮)を大正11年(1922)に三方原村に迎え、神社の名称を東照宮とした。同年に社殿が完成し、翌年には御遷座の儀式が執り行われた。昭和31年(1956)に三方原神社と改称し、今日に至っている。

現在の社殿は昭和48年(1973)に再建されたものであるが、境内には、「大正十二年(1923)」と刻銘された石鳥居が残っている。



図2-4-11 三方原神社石鳥居

### ④三方原開拓顕彰碑

#### ア. 気賀林顕彰碑

三方原開拓の民間代表者である気賀林は、明治2年(1869)に三方原開拓係となり、士族800戸の三方原入植の受入れ事業を完遂させた。明治6年(1873)からは茶園の開拓に専念し、百里園長として100町歩の茶園の育成と製茶工場の経営を成功させるとともに、地域行政に大きく貢献した。また、財産、長寿、子孫の3つに恵まれたことから浜松県令より「三富翁」の号が贈られた。

三方原神社の境内には「明治二十四年(1891)五月」と刻銘された気賀三富翁之碑が建てられ、三方原開拓の恩人である気賀林を顕彰している。



図2-4-12 気賀三富翁之碑

#### イ. 三方原開拓ノ碑

明治37年(1904)の百里園製茶工場の閉鎖により、120町歩に及ぶ茶園は宮内省御料局が買い取り予定で、当局はこの土地に植林し山林化する方針であった。これが実施されると、これまで苦心努力して開拓した耕地の大部分が山林となり村の衰退を招くことは必定となった。村の将来を憂えた7名の篤志家は銀行からの借入金で土地を買い取り、これを村民有志に2年賦で売却し、住民に所有させた。住民もこの7名の努力にこたえて精励し、次第に実績を上げるようになり、三方原開拓村滅亡を免れた。

このようにして、三方原開拓村存亡の危機を救った7名の功績をたたえて「昭和二年(1927)」刻銘の三方原開拓の碑が現在の三方原神社境内(当時の東照宮)に建てられた。



図2-4-13 三方原開拓ノ碑

この碑は、高さ 2.43 メートル、幅 1.07 メートルで「萬世不朽、三方原開拓ノ碑、貴族院議長正二位勳一等公爵徳川家達題額」と刻銘されている。

## (4)三方原台地にみられる人々の営み

### ①お茶の生産

浜松市には三方原台地を中心とした地域で栽培されている「浜松茶」と天竜地区の山間部で栽培されている「天竜茶」、「春野茶」がある。浜松茶は日照時間が長く温暖な気候のもと、厚い茶葉が育つことから、深蒸し茶が主流で、味わい深く香り高いお茶が生産されている。一方、天竜茶や春野茶は日照時間が短く寒暖差のある気候のため、茶葉が柔らかく、主に浅蒸しにするなど、平地から山間部まで特徴のあるお茶が生産されている。



図2-4-14 三方原台地の茶畑

これらのお茶を加工する施設として三方原台地には、宇津山製茶、早川園、まるたま製茶、沖村製茶など、古くから残っている製茶工場があり、その多くが自園で栽培から製造、販売まで手掛けている。

三方原台地でお茶の栽培が始まったのは明治7年(1874)の百里園からで、最盛期には120町歩もの茶園が広がっていた。明治37年(1904)の百里園解散に伴い、一時は減退したものの、昭和27年(1952)ごろ当時の県経済部長は「これからの農業は専門経営で、米や蔬菜の自家生産時代は過ぎた。開拓地農業においても、米は買えば良い。」との考えを持っており、戦前から良質の茶を生産する三方原台地に県茶業試験場を建設し、茶栽培にも力を注ぐようになった。

その後、待ちに待った三方原用水が完成したことで水不足が解消し、大量の水が必要不可欠である散水氷結法<sup>1</sup>が可能となり、茶の新芽を凍霜害<sup>2</sup>による被害から防ぐことで安定したお茶の栽培が行われるようになった。今でこそ防霜ファンが普及し多くの茶畑で設置されている様子が見られるが、当時は三方原用水が如何にお茶栽培においても重要であったか推察することができる。



図2-4-15 三方原用水(止水バルブ)と茶畑

現在でもお茶は馬鈴薯に次いで栽培面積が広く、三方原の主力農産物となっている。また、

<sup>1</sup> 凍霜害によってお茶が枯れるのを防ぐために、スプリンクラーなどで水をまく方法。

<sup>2</sup> 一番茶の摘み取りが行われる3月中旬から5月下旬までの時期に霜が降り、新芽の温度が $-2^{\circ}\text{C}$ 以下になると新芽が枯れてしまう。このような被害を凍霜害と言い、お茶の被害のなかで最も大きな割合を占める。



現在では佐鳴湖の浄化活動の一環として行われているヨシ刈り(風致 02「佐鳴湖のめぐみに育まれる歴史的風致」参照)で刈り取ったヨシを茶畑の敷き藁として再利用している農家がある。敷き藁として茶樹の間に敷くことで夏の暑さが根に達するのを防ぐだけでなく、乾燥を防ぎ肥料を永く保たせるなど多くの効能があり、古くからの農法である敷き藁と環境保全活動とが一体となったもので、今後も継続していくことが望まれる。



図2-4-16 茶畑に敷かれた「ヨシ」

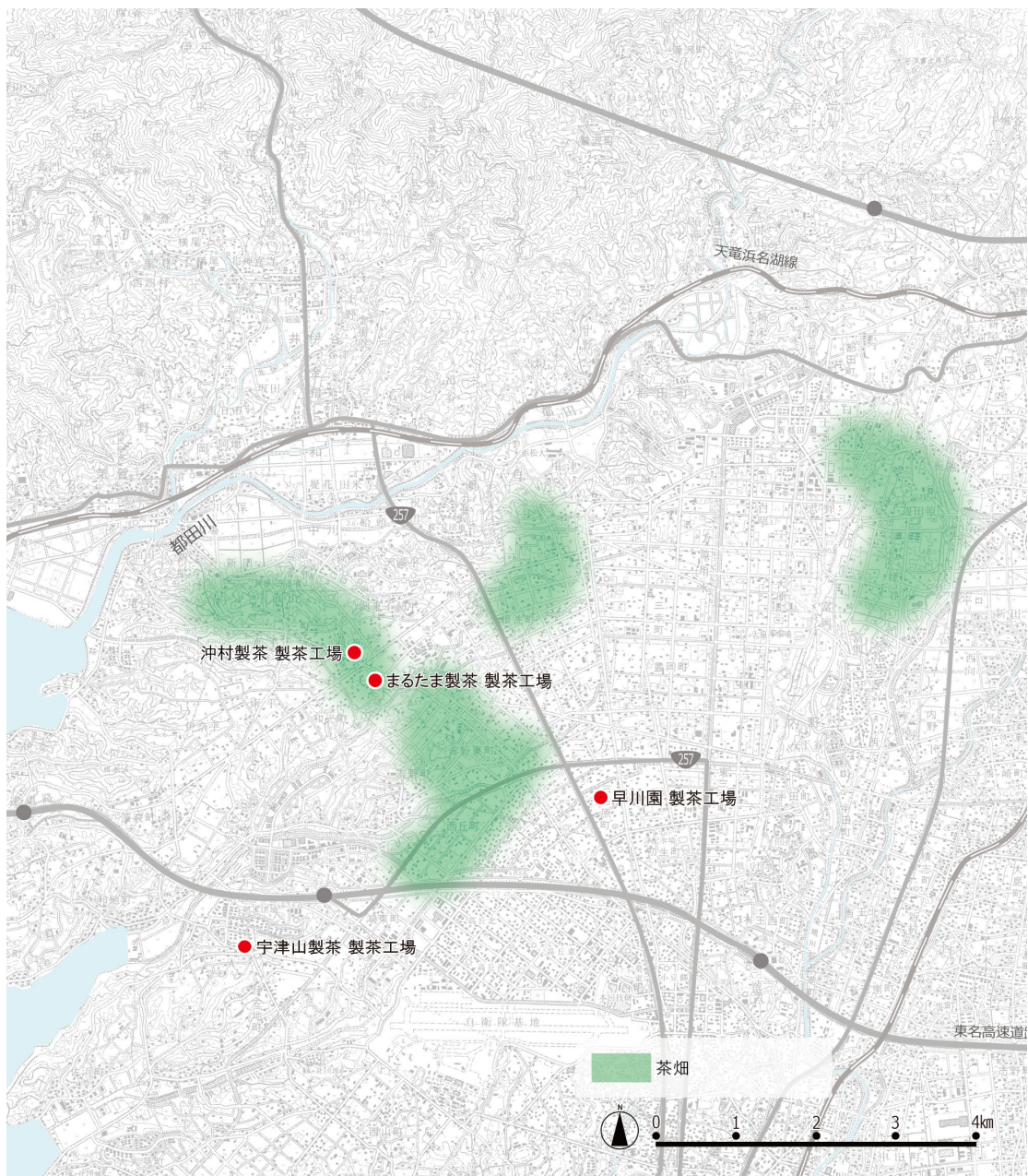


図2-4-17 三方原台地における茶畑の広がり

## ②<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯の生産

### ア.<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯の歴史

<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯の栽培が始まったのは、大正に入ってからである。戦争で当時栽培が盛んであった茶園が荒れてしまったことや食糧難だったことで、痩せた土地でも育ち、短期間で収穫できるなどの理由から馬鈴薯栽培が導入された。

生産者が最初に栽培したのは在来種の馬鈴薯だったが、大正後期に北海道の「男爵」が伝わると、積極的に男爵を栽培するようになった。その後、昭和45年(1970)に「メイクイン」が導入され、現在の一大産地を築いている。

馬鈴薯は乾燥に強く、他の作物と比べ水を多く必要としない作物であるが、やはり農業において「水」は重要で、昭和43年(1968)に<sup>みかたはら</sup>三方原用水の取水が開始されたことにより栽培面積が拡大し、それに比例して販売額は多少の増減はあるものの、堅調に伸びていった。

昭和40年代から連作障害<sup>1</sup>、そうか病<sup>2</sup>など、昭和50年代後半からゴジイモ<sup>3</sup>や中心空洞<sup>4</sup>などの問題も発生したが、生産者は問題が起こる度に原因を究明し、対策を講じてきた。それだけでなく、デンプン量を上げるための施肥設計や栽培方法、配合肥料などを検討した。また、昭和53年(1978)からマルチ栽培、昭和62年(1987)からトンネル栽培を導入し、計画的な出荷と労働力の分散を可能にした。

「<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯」という名前で出荷をするようになったのは、昭和28年(1953)から開始された農協による共同販売とされている。また、昭和32年(1957)5月27日の静岡新聞(夕刊)には「キメが細かくウマイ 有望な<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯」とのタイトルで<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯が紹介されていることから、少なくともこのころには「<sup>みかたはら</sup>三方原馬鈴薯」という名前が広く浸透していたことが窺える。

半世紀以上前に導入した品種「男爵」が今でも新しい品種に負けることなく、おいしいジャガイモの代表に名を連ねるのは、生産者の意地と努力によるものである。

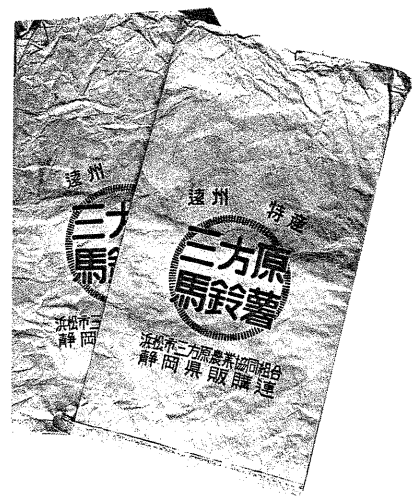


図2-4-18 昭和30年代に使用された出荷用の袋

<sup>1</sup> 同一作物(同じ科の野菜)を同じ圃場で繰り返し作り続けることによって生育不良となり、収穫量が落ちてしまう障害のこと。  
<sup>2</sup> 細菌が原因の病気で、芋の表面にクレーターのようなかさぶた状の病斑を形成する。  
<sup>3</sup> でんぷん質がのっていない、蒸かしてもホクホクしていない芋のこと。  
<sup>4</sup> 品質障害の一つで、クレーム要因のうち最も多い。芋の中心部が裂けるように穴になっている。主に農家や集荷場の職員は「空洞果」とも呼んでいる。

表2-4-1 「三方原馬鈴薯」の歴史【年表】

年	内容
大正初期	粘土質の痩せた土地でも栽培できる作物として導入 在来種を栽培
大正後期	北海道の「男爵」と青森の「三円」を導入
昭和 20 年(1945)ころ	「三円」に変わって「紅丸種」が入り、終戦のころから「農林 1 号」を導入 開墾が進み、栽培面積が増加
昭和 25～26 年 (1950～1951)	個人出荷の馬鈴薯を商人が市場出荷する
昭和 28 年(1953)	「三方原馬鈴薯」の名で共同販売が始まる 産地化の基礎が築かれる
昭和 31 年(1956)	三方原農協を中心に、国営検査を実施
昭和 38 年(1963)	「三方原馬鈴薯共販運営委員会」を設置し、共同計算を実施 収穫容器に木箱を使用することで、収穫作業の効率上がる 収穫後、納屋で 3 日以上風乾を指導。腐敗、擦り傷などが激減し、「三方原馬鈴薯」の評価が高まる
昭和 39 年(1964)	「三方原馬鈴薯」をソ連へ輸出(265t)
昭和 40 年(1965)	出荷用の資材を 20 kg 入りの紙袋から 15 kg 入りダンボールに変更し、荷造りの効率が上がる このころから、一部の圃場で連作障害が出始める 排水不良の圃場、未熟堆肥を施した圃場で、そうか病、粉状そうか病が多発し、ブルドーザーで天地返しすることで対応。これを受けて、特別銘柄「深耕馬鈴薯」を販売するが、数年で中止
昭和 43 年(1968)	三方原用水の取水が開始され、農業用水を安定して供給し、計画的な作物栽培が可能になる
昭和 45 年(1970)	メイクインを導入
昭和 46 年(1971)	種芋の産地を今金農協、北檜山農協(ともに北海道)に指定
昭和 50 年(1975)ころ～	当時の静岡県農業試験場を中心に、農業改良普及所の指導のもと、病害虫防除研究、栽培技術の研究に取り組み、栽培歴の作成、内容充実に努める
昭和 53 年(1978)	マルチ栽培が始まる
昭和 56 年(1981)	農林水産省が指定する「野菜指定産地」となる
昭和 57 年(1982)	「三方原馬鈴薯共販 30 周年記念大会」の開催
昭和 58 年(1983)	4 月の長雨で大不作。このころから、黒あざ病が拡大。 デンプン量を上げるための施肥量や栽培方法の検討が始まる
昭和 59～61 年 (1984～1986)	豊作が続くが、ゴジイモ、中心空洞の問題が発生
昭和 62 年(1987)	トンネル栽培を導入 6 月出荷の集中を緩和させ、5 月出荷の割合を高める施策を実施
平成 元年(1989)	出荷用ダンボールを 10 kg 入りに変更 出荷前のライマン価測定開始 早期枯れ上がり症状が発生し、不作。原因は地力の低下
平成 2 年(1990)	早期枯れ上がり不作を受け、正確な作況予測を行うため定点調査を開始
平成 3 年(1991)	国営検査から自主検査に変更

	機械化実演会を開催 取扱い金額 20.2 億円、1 kgあたり単価 252 円となり、取扱金額およびキロ単価が過去最高を記録する
平成 4年(1992)	「三方原馬鈴薯共販 40 周年記念大会」を開催
平成 7年(1995)	JA とびあ浜松が誕生し、「とびあ、三方原開拓農協、開拓連」の 3 農協の共計・共販となる
平成 9年(1997)	豊作により安値
平成 16年(2004)	中心空洞、内部障害果によるクレームが発生
平成 19年(2007)	価格低迷。エコファーマー認証取得の推進開始 とびあの重点 3 品目として、産地改革に向けた検討を開始 中心空洞再現試験を実施
平成 20年(2008)	馬鈴薯選果場が稼働

### イ.生産の様子

大正初期から始まった馬鈴薯をはじめとする三方原台地<sup>みかたはら</sup>での畑作は、年間を通した生産活動が行われている。

三方原台地<sup>みかたはら</sup>といえば赤土が有名だが、赤土は粘土質で、そのままでは根を張ることができず、水はけも悪いため、一概に赤土が馬鈴薯栽培に適しているとは言えない。質の良い馬鈴薯が育つようになったのは、台地の地質と相性の良い「男爵」という品種を導入したことだけでなく、生産者が丁寧に土を耕して根張りを良くし、排水が良くなるように畑を管理しているからこそ、今の三方原馬鈴薯がある。

現在、三方原台地<sup>みかたはら</sup>で栽培される馬鈴薯の約 80 パーセントが男爵芋で、残り 20 パーセントがメイクインとなっている。栽培は春作が主で、種芋は、10 月～11 月に北海道から男爵芋を中心に仕入れ、12 月～2 月に施肥を行い、順次 1 月～2 月に種芋の植付けを行う。2 月にマルチを貼り、3 月に芽かき、4 月～5 月に消毒、5 月～8 月が収穫、出荷となる。収穫前には白や薄紫色の可憐な花々が畑一面を彩り、周囲の景観を一層引き立たせるとともに、初夏の訪れを感じさせる。

馬鈴薯は、土壌の影響を受けやすく、生理障害を起こしやすいため、三方原台地<sup>みかたはら</sup>では、輪作として漬物用品種の大根が導入され、春は馬鈴薯、秋は大根という農家が多い。この漬物用大根は遠州名物の空っ風で乾燥のため「はざ」に干され、晩秋から冬にかけての三方原の風物詩であった。現在は調理用の品種(青首大根)が広い地域で栽培されるようになり、はざ掛けされた様子はあまり見られなくなったが、今後も残していきたい景観の一つである。



図2-4-19 大根干しの風景(昭和 33 年)



図2-4-20 馬鈴薯収穫の様子



図2-4-21 三方原馬鈴薯

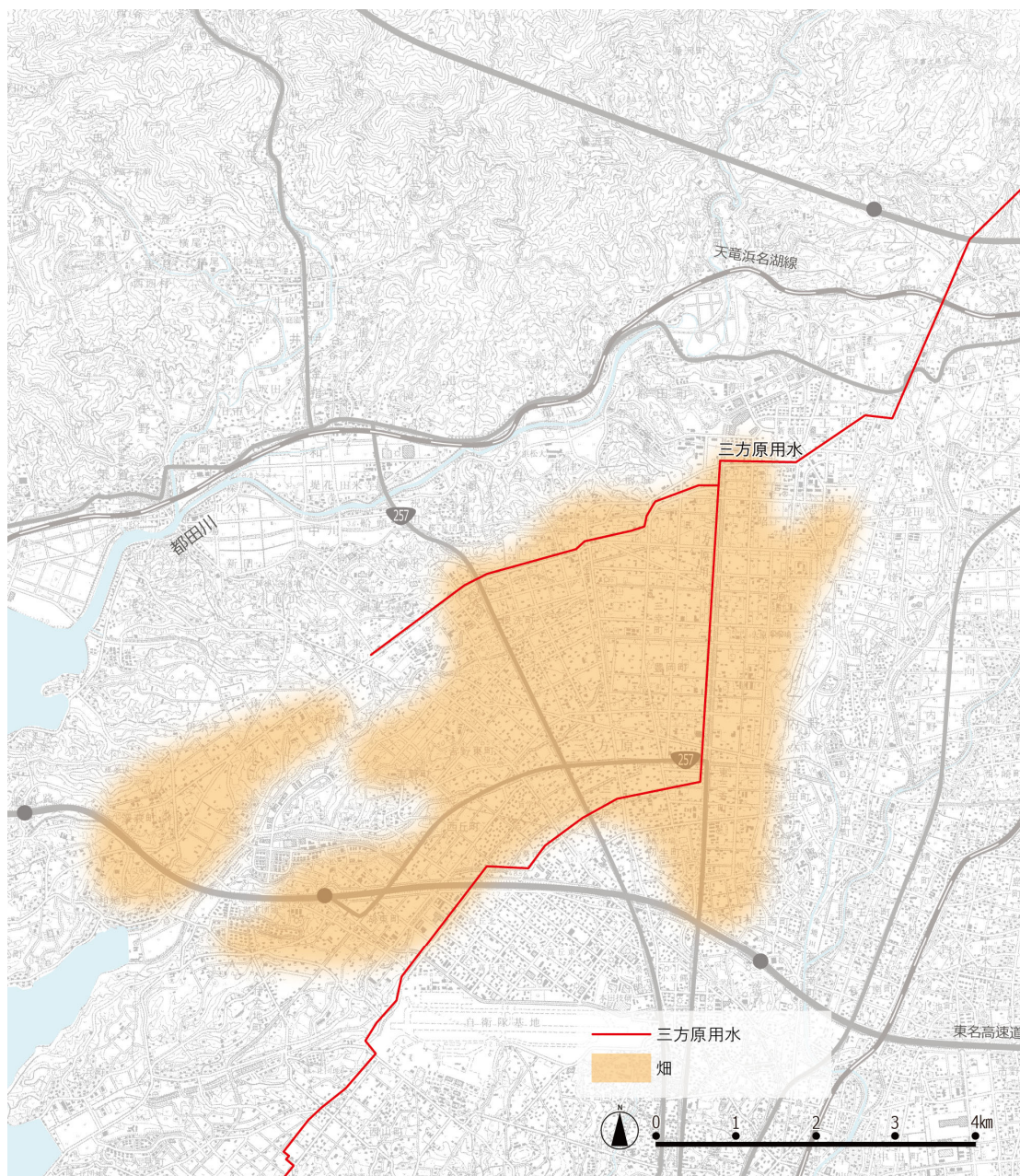


図2-4-22 三方原台地における畑地の広がり

### ③<sup>みかたはら</sup>三方原神社例大祭

毎年10月中旬に行われる<sup>みかたはら</sup>三方原神社の例大祭では、氏子の安全を祈るとともに、<sup>みかたはら</sup>三方原開拓に尽力した先人の遺徳をしのび、開拓された土地での五穀豊穡を祈る。

例大祭は浜松城内に祀られていた「東照宮」を大正11年(1922)に<sup>みかたはら</sup>三方原村に迎えて以来、形態を変えながらも脈々と引き継がれてきた祭典で、前夜祭と本祭の2日間に渡り執り行われる。当初は日光の東照宮に倣って10月16日と17日に行われていたが、人々の利便を考え、この日に近い土曜日と日曜日に行うようになった。

『昭和5年(1930)<sup>みかたはら</sup>三方原村郷土調査』によると、「村社祭典ハ毎年十月十六、七日ニ施行 村民参拝 豊作多幸ナラン事ヲ祈ル 凶作不況ノ年ヲ除キ餘興トシテ芝居ヲ行フヲ通例トス」と記載されていることから、当時から神事と併せて余興も行われていたことが窺える。

令和元年(2019)の本祭では、午後1時50分から代表自治会による祭典本部への挨拶と子供連ラッパ隊によるラッパ演奏で始まり、続いて各町の子供連によるお囃子が舞台上で披露される。その後、5町合同の子供連ラッパ隊が<sup>きがさんとみおう</sup>気賀三富翁之碑及び<sup>みかたはら</sup>三方原開拓ノ碑を背景に境内を練り歩く。

本祭式典は午後3時からで、宮司や巫女、氏子総代、近隣自治会長などの関係者による神事が社殿にて行われる。神事に先立ち、関係者は神社境内にある手水鉢により身を清める。神社の御祭神は東照大権現(徳川家康)で、秀忠、家光も合祀されていることから、氏子総代は三つ葉葵紋付のネクタイ姿で式典に臨む。このことから、<sup>みかたはら</sup>三方原神社はかつて東照宮であったことが感じられる。

式典が終了すると社殿前や舞台前で餅投げが行われ、境内は賑やかさが増す。その後、舞台にて余興として演舞や演奏が披露され祭典に花を添える。最後に祝い奉納練りとして、青年会による浜松まつり同様の勇壮なラッパと太鼓のリズムとともに「オイショ！オイショ！」や「ヤイショ！ヤイショ！」の掛け声で練りが練り広げられ、午後9時を目途に例大祭が終了する。



図2-4-23 本祭式典の様子



図2-4-24 境内を練り歩く子供連ラッパ隊

## (5)まとめ

三方原<sup>みかたはら</sup>台地の発展は明治維新の大きな変革に伴う士族入植における開拓から始まり、先人たちの開拓営農への血と汗のにじむような努力と三方原<sup>みかたはら</sup>用水の通水を経て、不毛の地と呼ばれた台地から先進農業地域へと大きく姿を一変させた。現在でも、開拓に尽力した先人の遺徳をしのぶとともに、農作物の品質維持及び向上のための取組が続いている。

こうした近代以降に開拓された畑地を背景に、明治・大正・昭和から続く農業活動と先人の遺徳をしのび開拓地の五穀豊穡を祈る祭礼が一体となった景観は、今後も維持向上させたい歴史的風致である。

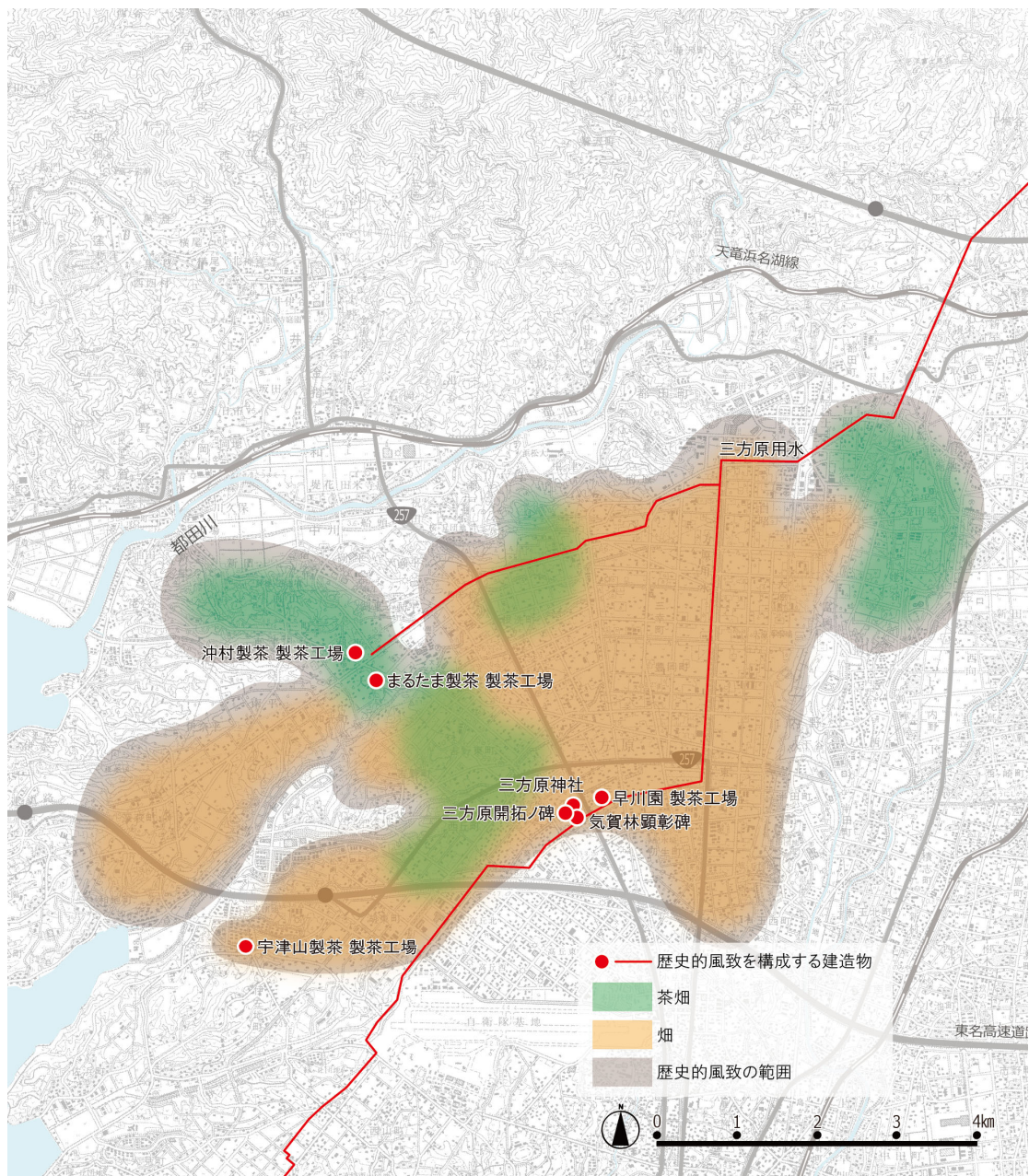


図2-4-25 歴史的風致の範囲

## 三方原開拓に関わる顕彰碑

三方原には気賀林顕彰碑や三方原開拓ノ碑のほか、三方原を救った渡辺素夫と、気賀林とともに三方原開拓の三恩人と呼ばれる横田保と間宮鉄次郎の顕彰碑が残されている。

### 渡辺素夫顕彰碑

昭和初年の世界的不況の影響などから三方原村の財政は困窮し、村長に就任する人が不在の事態になった。そこで村議会の代表者が渡辺素夫元浜松市長宅を訪ね、村の窮状を訴えて村長就任を懇請し、昭和7年(1932)に三方原村長に就任した。

渡辺村長の特に大きな業績は、地区にあった約200町歩の県有林の払下げを実現し、農家の耕地の拡張を行ったことである。また、三方原村の困難な時代に経済更生に大きく貢献し、村を救済した。

この功績は極めて大きなものであり、昭和13年(1938)に地元民により「渡辺素夫翁之碑」が清水地区中心部(現在の中央区三方原町にある清水公民館前)に建てられた。



図2-4-26 渡辺素夫翁之碑

### 横田保 顕彰碑

稲荷神社跡地には気賀林の後継者として三方原開拓に尽力した横田保の顕彰碑がある。

横田は、明治7年(1874)から始められた三方原茶園の開拓に当たり、気賀林のよき協力者となり、気賀林の没後は百里園長として100町歩の茶園の育成、製茶工場の経営、紅茶伝習所を開設するなど、茶業振興に大きな足跡を残した。

この業績を永く後世に伝えるため、明治40年(1907)に中村太郎三郎ら7名が建立したものである。



図2-4-27 横田保君之碑

### 間宮鉄次郎顕彰碑

三方原墓園には明治2年(1869)に三方原台地へ入植した士族800戸の代表者である間宮鉄次郎の墓碑がある。

間宮は剣道の達人で幕末には京都武徳殿の審判を務めた。

また浜松勤番頭取のほか、三方原では茶園開拓を成功させて百里園副園長、学区取締、学務委員、戸長、区長など幅広く活躍した。

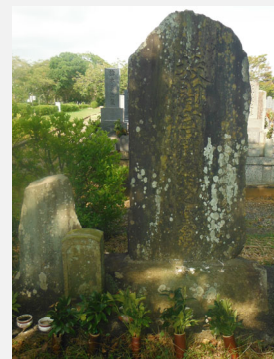


図2-4-28 故間宮鉄翁之墓